

3. 川と人々の暮らし

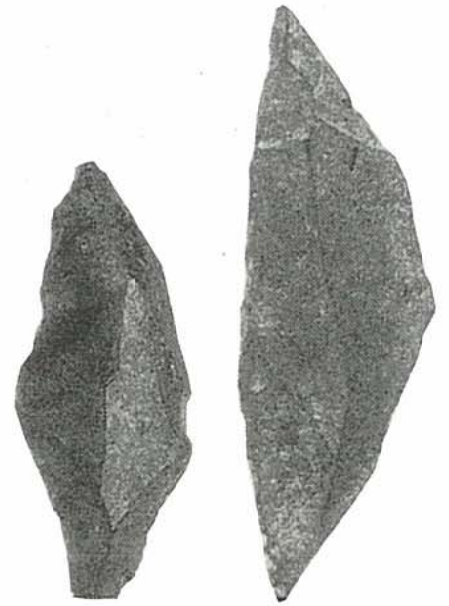
3-1: 流域に残された遺跡や古墳

旧石器時代

今からおよそ3万3千年前から1万2千年前の後期旧石器時代には、耳川流域には人が生活していました。

【3-1(旧石器時代)】:日本に人類が暮らし始めたのは、今から3万3千年以上前の前期旧石器時代と言われていますが、この時代に人が生活していた跡は、九州ではごくわずかにしか発見されていません。それから後の1万2千年前までの時代は後期旧石器時代と呼ばれ、氷河期の最後のとても寒い時代でした。

この時代の人々は、大型草食獣の狩りや植物性食料の採取をしながら、小河川の流域など一定の範囲内で移動生活をしていたと考えられています。狩猟には、ナイフ形石器や剥片尖頭器、細石刃などの道具を使用していたようです。耳川の西郷村の向内野々遺跡でナイフ形石器などが出土していることから、後期旧石器時代には耳川流域にも人が生活していたことがわかりました。



三稜尖頭器
(西郷村仮迫)

ナイフ形石器
(西郷村向内野々)

自然と暮らし — (耳川文化の会 中田 豊さん(東郷町)のお話)

今から70年位前に私がおとしよりから聞いたり、自分で直接みた我が村の自然と生活の一部を話してみよう。

山を眺めると今どこもそこも杉の木を植えている処が多いが、その頃は雑木林が多かった。そしてね、各区には茅立野といって家の屋根を葺く茅を切る野原が必ずあった。それだから瓦屋根の家は何処そこにあるくらいで、後はみんな茅ぶきの家ちゃった。

また、雑木林が多かったから炭焼きをする人が多く、飯をたくにも、風呂を沸かすのもみんな薪をたいていた。

川は今のよう「よしの子」は生えておらず、立派なもんちゃった。夏の頃、耳川や坪谷川に水浴びに行くと喉がかわくと、その川の水を呑んだりしたもんだ。そんなに川の水がきれいちゃった。

だから、魚がぎょうさんあって、特に夏などはみんな川に行くと鮎かけをしたり、イダつりをしたりしたもんだ。

そうすると山から伐り出して流す材木が川上の方から流れてきたり、炭を一ぱい積んだ高瀬舟が下ってきたりして、楽しい、のどかな風景ちゃった。

道路は富高から西郷村に通ずる県道と坪谷を通って南郷村に通ずる県道などのほかは、1メートル50センチか、1メートル位

の狭い道で夏の雨が降る時はぬかるみになったり、又冬の霜がふる頃は霜どけがして、どろどろになったりしたもんちゃったよ。

学校の生徒はその道を夏はハダシで歩くので教室の入口には1メートル50センチ四方の水タンクが造ってあってそこで足を洗って上り口においてある麻袋で足をふいて上がっていたので廊下はいつも泥で汚れていたものだ。冬でもズックをはく者は滅多にいないので、たいてい草履がハダシであったので、足にはヒビが一ぱいできて、夕方お湯に入るときは痛くてたまらなかった。

今こそ、この辺には麦を作っていないが、その頃は田も畠も麦が作ってあったので、春になると、その麦が一斉に穂を出す、その穂に混じて病気にかった黒い穂が出るので、それを取って麦苗をつかって吹いて、麦畠に巢をかけたヒバリの鳴く声と一緒に和やかな雰囲気だった。

農家が一番忙しい時期は田植えどきで、そのときは小学生も学校を休んで手伝いをしたり、子守りさせられたり。また、学校に小さい子供を連れて来て勉強する生徒もいた。

色々たくさん話があるが今日はこのくらいにしておこうかね。

※イダ:ウグイのこと

縄文時代

縄文時代には定住化がはじまり、耳川沿いに人が集まり暮らしていたようです。

【3-1(縄文時代)】:今からおよそ1万2千年前には縄文時代には、温暖化により狩猟中心の生活から植物食を中心とした生活に変わっていきました。またこの頃から漁労が発達し、食べ終わった魚や貝などを捨てた跡が貝塚として現在でも残っています。西郷村の遺跡の分布から考えると、耳川流域では川沿いに2~5キロメートルの間隔で人が集まり暮らしていたようです。

※漁労:仕事として水産物をとること

弥生時代

弥生時代には米作りが広まり、水田を中心にした社会が形づくられていきましたが、山地では縄文的な社会も残っていました。

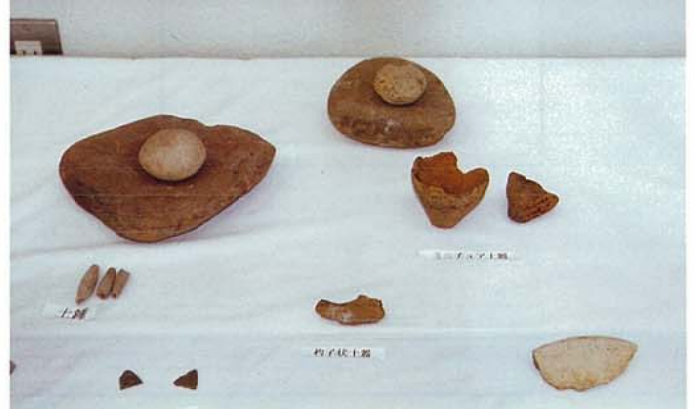
【3-1(弥生時代)】:今からおよそ2千3百年前から1千7百年前までの間は、水稻耕作を中心とする食料生活が始まった段階で、弥生時代と言われています。この頃、朝鮮半島からの渡来人がもたらした米作りが広まり、低地と内地に水田を中心にした社会が形づくられていきました。しかし、山地では狩猟と採集や焼畑(陸稲)を続ける縄文的な社会も残っていました。

古墳時代

日向地方では4世紀の後半頃に最初の前方後円墳が築かれ、耳川本支流でも遺跡が発見されています。

【3-1(古墳時代)】:今からおよそ1千7百年前(3世紀の後半)から1千3百年前(7世紀)までは、各地の有力者の大きな墓である前方後円墳が築かれた古墳時代でした。初期の古墳は、畿内、中国地方と北部九州を中心とする西日本各地で築かれていました。

日向地方では、3世紀の後半頃に生目古墳群や西都原古墳群において最初の前方後円墳が築かれ、耳川本流や支流では緩やかな丘陵上などに小円墳や遺跡が発見されています。



縄文・弥生時代の土器・石器(東郷町出土)



西郷古墳(西郷村)



箱式石棺(西郷村)

流域に残された
遺跡や古墳・遺跡位置図

凡	例
●	遺跡
●	城跡
●	古墳
—	二級河川
—	その他の河川
---	市町村界



史跡一覧

資料:「全国遺跡地図(宮崎県)」昭和43年・文化財保護委員会/「日向市の歴史」昭和48年・日向市/各市町村史等

区分	番号	名称	(時代)	番号	名称	(時代)
日向市	1-1	飯谷古墳		1-3	遠見古墳	
	1-2	余瀬古墳				
東郷町	2-1	小野田遺跡	(縄文・弥生)	2-8	山陰城址	
	2-2	老谷遺跡	(弥生)	2-9	坪谷城址	
	2-3	鶴野内遺跡	(縄文・弥生)	2-10	西城址	
	2-4	一谷原遺跡		2-11	樋田遺跡	
	2-5	山陰古墳		2-12	広瀬田遺跡	
	2-6	鶴之内古墳		2-13	赤松遺跡	(弥生)
	2-7	日田尾古墳		2-14	下水流遺跡	(縄文・弥生)
西郷村	3-1	八幡ノ前古墳	(縄文)	3-12	石塚の鼻遺跡	(縄文・弥生)
	3-2	棕原遺跡	(縄文)	3-13	鳥の巣遺跡	(縄文・古墳)
	3-3	内面遺跡	(縄文)	3-14	西郷古墳	(縄文・古墳)
	3-4	藤野長堀遺跡	(縄文・弥生)	3-15	内野々遺跡	(縄文・弥生・古墳)
	3-5	外園遺跡	(縄文)	3-16	上野原城址	
	3-6	曾谷原遺跡	(縄文)	3-17	上野原城址	
	3-7	上野口原遺跡	(縄文・弥生)	3-18	仮迫城址	
	3-8	川原遺跡	(縄文・古墳)	3-19	下八峽城址	
	3-9	若宮西ノ前遺跡	(縄文)	3-20	道野々原城址	
	3-10	庵元遺跡	(弥生)	3-21	鳥の巣城址	
	3-11	赤木遺跡	(縄文)			
諸塚村	4-1	藤の塚遺跡		4-4	諸塚古墳	(縄文)
	4-2	松の平古墳		4-5	塚原城址	
	4-3	川の口遺跡		4-6	矢村城址	
椎葉村	5-1	大河内遺跡	(縄文)	5-8	和戸内山遺跡	(縄文)
	5-2	人夫屋敷遺跡		5-9	岩屋戸遺跡	(縄文)
	5-3	御池遺跡		5-10	小ヶ倉遺跡	(縄文・弥生)
	5-4	竹の枝尾遺跡		5-11	中の八重遺跡	(縄文)
	5-5	下福良遺跡		5-12	中の八重浄行寺西側遺跡	
	5-6	尾田遺跡		5-13	御用塚	
	5-7	十根川神社周辺遺跡		5-14	羽田遺跡	

1-1:飯谷古墳



2-8:山陰城址



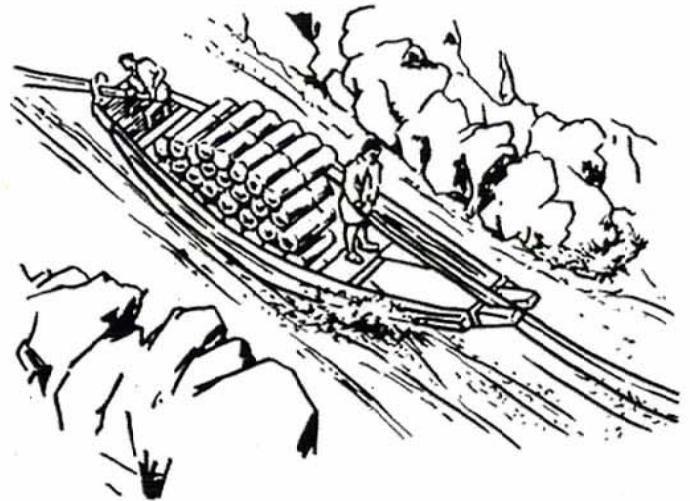
2-10:西城址



この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の20万分の1地勢図を複製したものである。(承認番号 平12九複、第598号)

3-2:川を生活の場とした歴史 (1) 舟運の利用

耳川上流でとれる産物や木材は、川を使って下流や都会へと運ばれていました。むかし、川は荷物を運ぶ大事な『道』だったのです。



木炭を積載し急流を下る高瀬舟
(資料:西郷村役場)

① 高瀬舟

高瀬舟は木炭やその他の産物を美々津港まで運ぶ大切な舟で、西郷村笹陰からは、一日で往復することができず、二日かかっていた。

[3-2-(1)-①]:人々は高瀬舟に木炭やその他の林産物(しいたけ・堅木・コウゾ皮・シロ皮等)を積んで耳川を下り、美々津港で木炭問屋などに卸していました。問屋はそれらを千石船に積み込んで大阪、京都といった都会で商品として売りさばっていました。

木炭の生産量は諸塚村、西郷村が最も多く、高瀬舟は西郷村、東郷村(現東郷町)が多かったようです。山陰あたりの船頭は、舟を西郷村笹陰あたりまで上り荷物を積んでいましたが、一日で往復することはできず二日かかりでおこなわれていました。

笹葉や諸塚あたりの川底には、大きい岩や石があり流れも急でとても危険なので、諸塚村吐の川より下流が適当な積荷の場所だったようです。

上りは川の流りに逆らっての舟運びだったのですが、美々津から余瀬、飯谷、鳥川あたりは流れもゆるやかで、潮の満ち干によつては比較的楽に上れた日もあったということです。竹竿に白帆を揚げて川をすいすいと上っていくようすは、とてものどかな風情だったでしょう。

高瀬舟

—(耳川文化の会 中田 豊さん(東郷町)のお話)

(高瀬舟は)長さ15メートル位で、巾は舟べりの一番広い処で2メートル位の舟に木炭や椎茸や木材などを積んで運ぶので大変な仕事であった。美々津まで下って行って、今度は川を遡るには、丁度よい風でもあれば真白い帆を上げてすいすいと楽にのぼってくるが、風がない日は船頭の自力で漕いだり曳いたりして上らねばならないので、仲々骨の折れる仕事であった。

河原のない処は二人の船頭が力を合せて漕ぎ、帆を上げて風の応援を求め、河原がある処では一人が六尺禪に裸脛で草鞋をはき、真白い紡績の綱を肩にかけて引っ張り、舟に乗っている者は斜めに沖に漕ぎ出すようにして、舟をのぼらせる作業は重労働であったようである。

なが ② 流し

木を一本一本川に流し込んで、そのまま目的地まで運ぶ「流し」では、山師^{やまし}たちが下流までおいかけて流していました。

【3-2-(1)-②】：流しというのは、木材をイカダにせず一本一本川に流し込んで、そのまま目的地まで運ぶ方法です。途中では、流し^{やまし}の山師^{やまし}たちが鳶口^{とびくち}(棒の先に鉄製のかぎを付けたもので、物を引き寄せたりするのに用いる)を持って、一本一本岸边にたまる木を流れに乗せることを繰り返しながら、下の網場^{あば}まで追い流していました。

網場^{あば}とは川に綱^{つな}や網^{あみ}を張り渡して流木をいったん集合させる場所で、そこからまた次の網場^{あば}まで流します。



流し山師による木材流し
(資料:西郷村役場)



流し山師たちも着ていた仕事着
(東郷町・写真はシュロミノ)

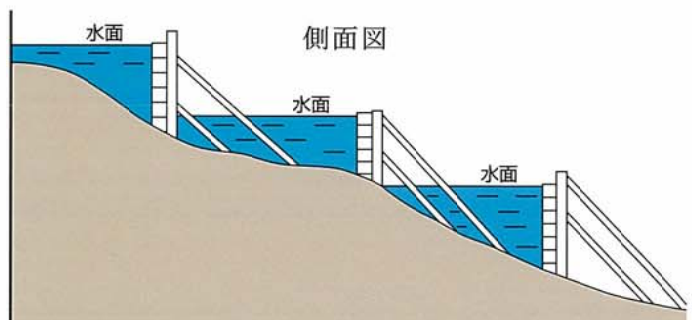
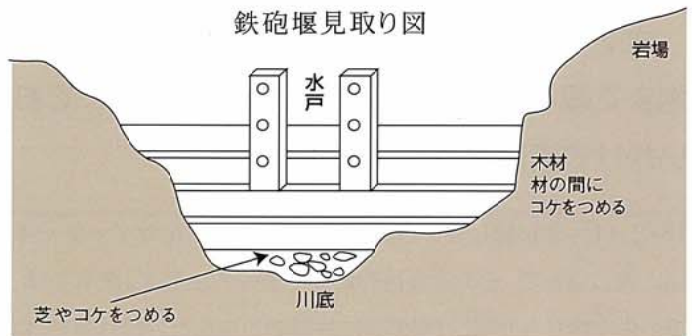
③ 鉄砲堰

切り出して谷川にためた木は、「鉄砲堰」などで水の力を利用して下流へ流しました。河口までは、長いときは半年以上かかりました。

【3-2-(1)-③】:谷川に落として貯まった木(「つけこみ」と呼ばれていた)を下流に流し出すためには何度か「せき流し」をしなければなりません。秋から冬にかけて山奥から本流の耳川に集められた木材は、3月頃から「流し山師」によってさらに下流に流されました。数十人が「流し」に当たり、上流のほうから泊まりがけで何日もかけて川下に向かっていきました。そして美々津幸脇の土場につくのは、半年位かかることもあったそうです。

美々津、幸脇の浜についた木材は、陸上げして乾かしたあと、大阪方面へ送られました。

木材の川流しとイカダ流しは命がけの仕事でしたが、荷馬車の利用の出来るような道路が建設され、ダム、発電所の建設開始と共に、耳川からその姿を消して行きました。そしてついに、昭和7、8年頃にはこの情景は全く見られなくなりました。



※鉄砲堰:堰は下流の谷間に木材を集めておき、上流の堰を一度にきって、一気に木材を押し流すのでこの名がつけました。

④ 筏流し

古くからたくさんのお木がとれた入郷地帯では、イカダで木を下流へ流していました。

【3-2-(1)-④】:奥地の山で木を切って、それをイカダに組んで流すイカダ流しが耳川では昔からよく行われていたようです。美々津近くになると楽になりますが、上流では細心の注意が必要で、危険を常に伴っていたということです。



木材の搬出用具(宮崎県総合博物館展示)



⑤ 駄賃つけ・水運・林業

明治の初期頃まで、山で生産された物を売りに出かけたり、必要な物を持って帰るため、馬に荷を積み目的地まで運ぶ「駄賃つけ」という仕事がありました。

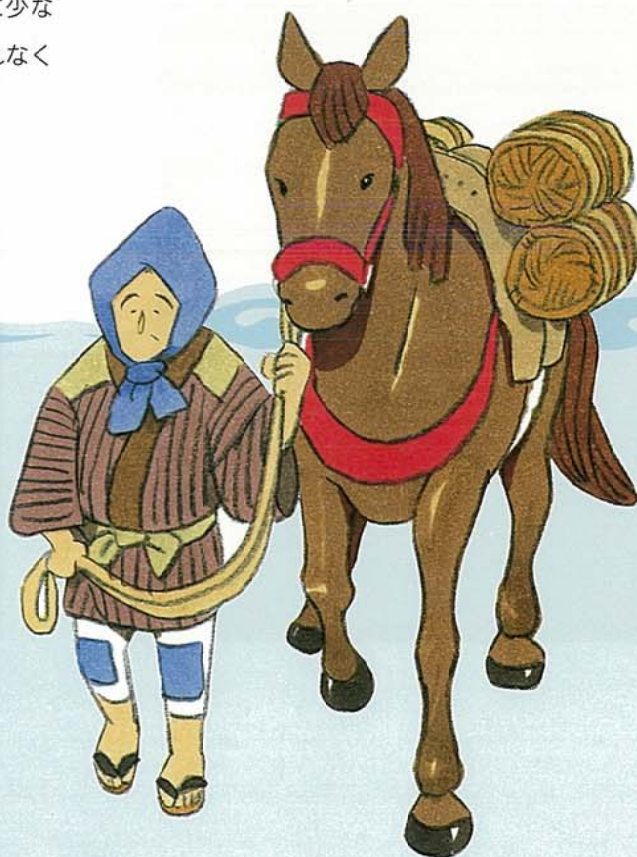
[3-2-(1)-⑤]: 高い九州山脈に囲まれた椎葉^{しいば}や諸塚^{もろづか}地方は田畑が少ないので、主に林業^{たよ}に頼って生活をしてきました。クヌギ、ブナ、ツガ、ケヤキなどの良い木があることから、椎茸や木炭、木材などの生産が盛んで、また焼畑農業を中心にした雑穀やお茶^{さいばい}の栽培も行われていました。そこで作った物を売り、生活に必要な物を運ぶ方法が「駄賃つけ」でした。これは、馬に荷物を積み目的地まで運んでお金をもらう仕事のことで、農家の大事な仕事のひとつでした。

この地方では、明治の初期頃まで馬や川舟で運ばれていました。大きな物は、耳川の流れを利用しイカダや川舟で美々津の港まで運んだようです。

駄賃つけによって運ばれた産物^{さんぶつ}は木炭、椎茸、茶、カジカワ、シュロ皮、木くらげ、キブシ、山菜^{さんさい}などで、持ち帰るものは米、塩、海産物^{こぶく}、呉服、油、陶器^{とうき}などでした。駄賃つけによる荷物運びも明治の中期以降、村に店ができたり道路が整備され次第^{しだい}に少なくなり、昭和の初期頃を境にしてその後はほとんど見られなくなりました。



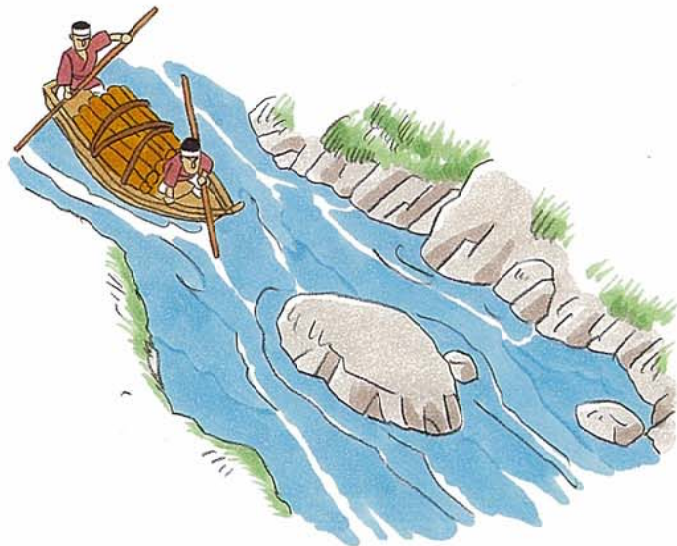
木炭の運搬道具(宮崎県総合博物館展示)



⑥ダイナマイトでの岩石爆破

昭和初期、塚原と田代の間に舟の通行のじゃまになる所があったので、村人はダイナマイトを使って岩を爆破し、舟やイカダを通りやすくしました。

[3-2-(1)-⑥]: 明治中期から昭和初期までは、小八重と美々津港の間を舟やイカダが盛んに行き来していました。塚原(吐合)荒谷の間は途中に岩のある危険な場所があり、荒谷から小八重を通り美々津河口まで行けたのは、明治後期から大正初期になってからのようです。塚原、田代の間には岩石が舟のじゃまとなっている所があったので、村人は冬の水量の少ない時期に、ダイナマイトを使って岩を爆破し、舟やイカダの通行をしやすいようにしたという記録が残っています。この爆破作業では、事故で亡くなった方がいて、現在、吐の川に遭難の記念碑が建立されています。



遭難記念碑 明治廿七年三月建設
 「甲斐筆治氏、宮崎県西臼杵郡諸塚村一人、資性温厚、寡言、義侠心ニ富ミ、屢他人ノ急ヲ救ヒタル事衆人ノ目撃スル所ナリ、明治元年年令十七ニシテ弁指職ニ擧ラレ続イテ保長トナリ、組合世話人トナリ勤続十五年、明治廿二年町村制実施ニ際シ諸塚村会議員ニ推選サレ土木事務ヲ分掌ス。同廿五年一月耳川上流舟路開削ノ工起ルヤ之ヲ監督トナリ、西郷村地先キ宇松附瀬ニエヲ起シ、爾来勉勵其任ヲ尽セシガ同年三月七日、崩ノ瀬工事中ダイナマイト爆烈シテ非命ノ死ヲ遂ゲタリ。
 時二年四十七実ニ諸塚村ノ為ノ功勞少ナカラズ、而巳ナラズ将来有為ノ人物ヲ失フ事全村拳テ痛惜セザルナシ、本部有志ノ發起ニ依リ廣ク義援金ヲ募集シ石碑ヲ建設シテ其ノ靈ヲ弔フ。」



甲斐筆治遭難記念碑

(2): 渡し船

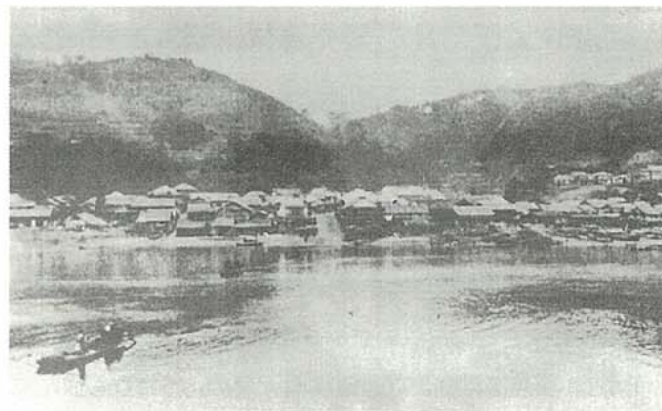
耳川の上流では流れが急なため、渡し場の数はとても少なかったようです。大正時代には、美々津と幸脇のあいだを渡し船がかよっていました。

[3-2-(2)]: 耳川の本流、特に美々津付近、東郷町、西郷村を流れるあたりには渡し場があり、人や荷物を運んでいました。それより奥地は流れも崖も急だったため、渡し場を作ることが難しかったのです。現在の椎葉村那須橋あたりや諸塚村には渡し場があったようですが、耳川の渡し場の数は極めて少なかったようです。

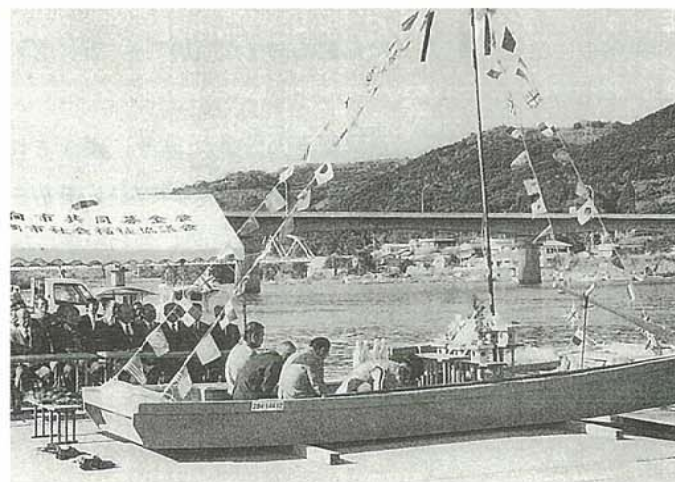
大正時代、日向市・耳川の渡し船は、美々津と幸脇を結び、客馬車の乗り場があり両方の船繋ぎ場でお客さんを渡していました。この渡し船も美々津大橋が完成してからは姿を消しました。



美々津に残っている渡し場の面影
※「渡し船ご利用の方は旗を上げて下さい」と書かれている。



渡し船



渡し船復活の催し(現在は行われていない)

◆耳川の主な渡し場の位置図◆



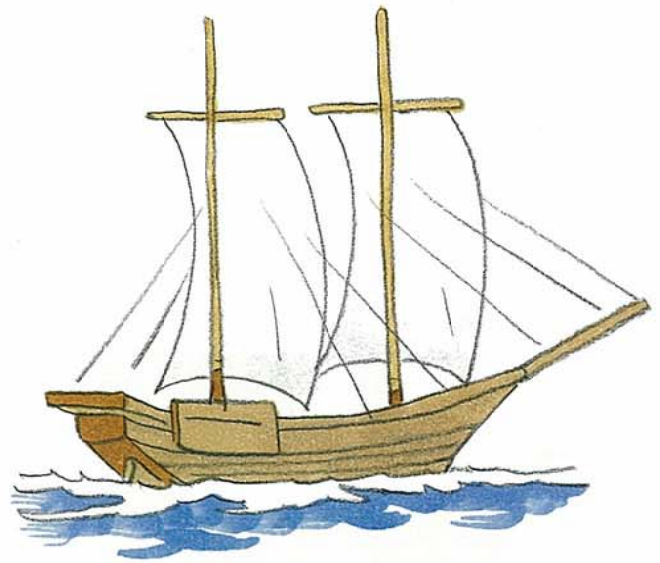
※山陰村には、この他に宮ヶ原渡し・横瀬渡し・仲の原渡し・滝下渡し・下村渡し・硯野渡し・大工野渡し等がありました。

(3):千石船

明治や大正時代の美々津は、帆船の柱がたくさん立ち並び大きな商港として栄えていましたが、次々に建設されたダムや鉄道の開通で利用されなくなり、小さな漁港になってしまいました。

【3-2-(3)】:明治や大正時代には千石船と呼ばれる、2~3本マストのあまり大きくない帆船が多く使われていて、立磐神社あたりから鞍蔵、腰越あたりまで、帆船の柱が林のように立ち並んで、川上から流されてきた木材や、高瀬船で運ばれてきた椎茸等を積み込んでいました。船積は天候によっては4~5日かかりました。当時帆船のことを帆前船と呼び、風の向きが順調でも、阪神地区まで15日以上かかりました。

大正12年の日豊本線の全線開通の影響や、次々に建設された水力発電ダムのため、耳川は完全に物を運べなくなり、港もさびれてしまい、現在は主に小さな漁船のための港に変わりました。



千石船

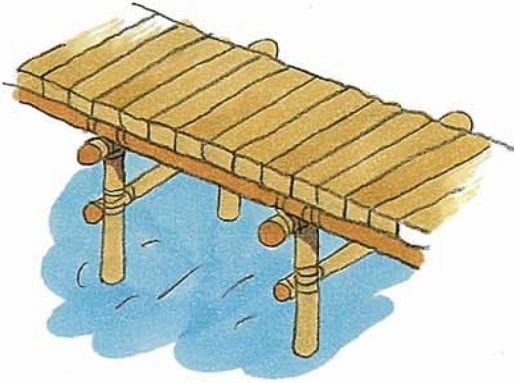


(4):橋の歴史

橋は最初、丸太橋のようなかんたんなのが作られ、だんだんと発達しました。

2.木橋

木を組んで造る橋です。洪水で流されることもあります。



4.眼鏡橋（石橋）

石を組んで造った橋で木橋より丈夫です。



6.コンクリート橋

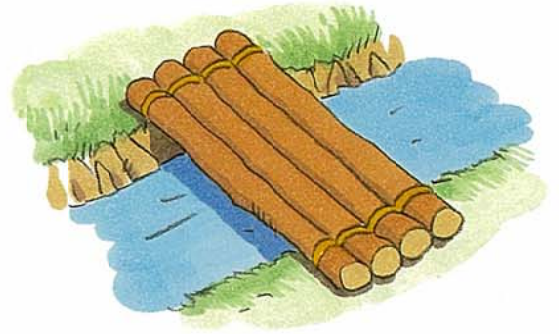
コンクリートで造る橋で、多くの橋が造られています。



美々津大橋

1.丸太橋

木を切って川に渡しただけのかんたんな橋です。



3.舟橋

舟をつないで造る橋です。洪水になると使えなくなります。



5.鋼製橋

はがね（鉄）で造りかなり丈夫なので、長い橋を造れます。



美々津橋

橋

の

発

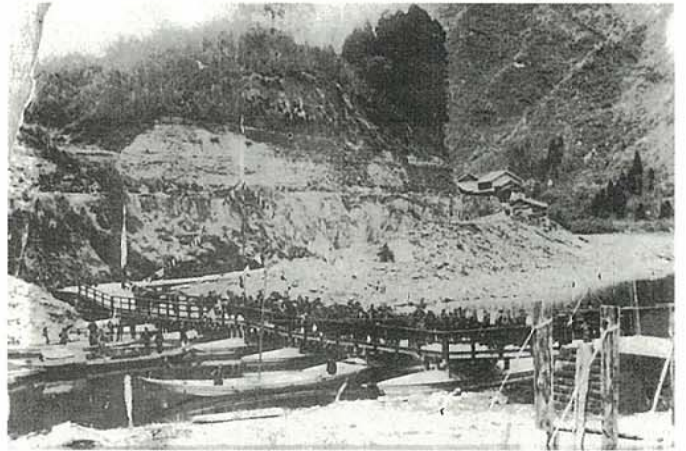
達

① 舟橋

大きな工事をしなくても、舟を利用して橋をかける方法もありました。

[3-2-(4)-①]: 舟橋は、橋のない川に舟を浮かべて、その上に板をおいて臨時の橋としたものです。洪水の時は切り離して岸につないでおきました。

右の写真は、東郷町舟戸付近に明治41年頃に造られていた船橋です。



② 眼鏡橋

明治の終わり頃に石造りの眼鏡橋が作られ、現在でもいくつか残っています。

[3-2-(4)-②]: 明治41年と42年に相次いだ台風で、流された木の橋にかわって石で作られたメガネ型の橋が作られました。現在でも、この眼鏡橋のいくつかは東郷町と西郷村などに残されています。



野々崎橋（東郷町・坪谷川）



瀬戸橋（東郷町・坪谷川）

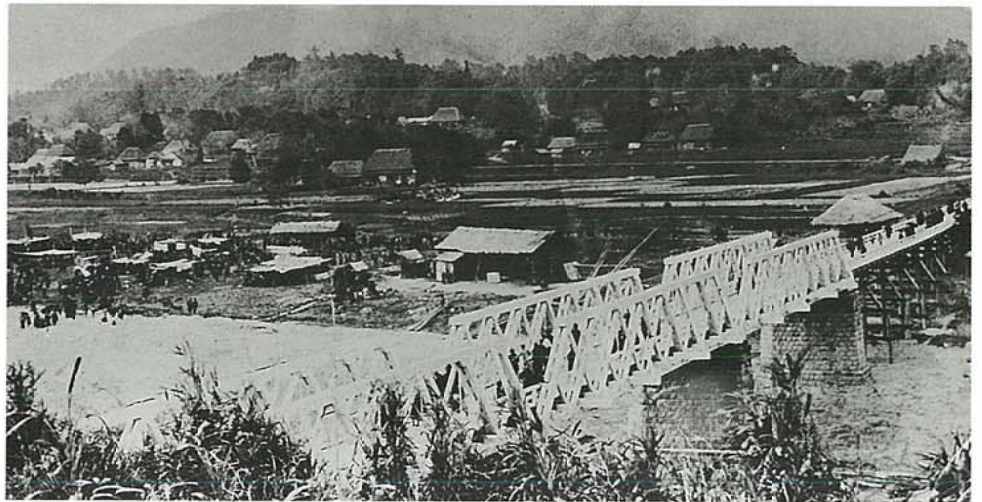


坪谷本村橋（東郷町・坪谷川）

③ 東郷橋今昔物語

東郷橋は、これまでに何回も作りなおされました。

【3-2-(4)-③】東郷橋は同じ名前で3回も作りなおされました。一番古い東郷橋は、明治43年に鶴野内と羽坂硯野の間にかけられた橋です。この橋は洪水で2回流されましたが、仮橋をつけて不便にならないようにしました。また、昭和10年に場所が上流に変わりましたが、この木でできた東郷橋も洪水で流されてしまいました。その後、舟を並べたり仮橋にしたり応急修理をした後で、昭和24年に現在の橋が完成しました。

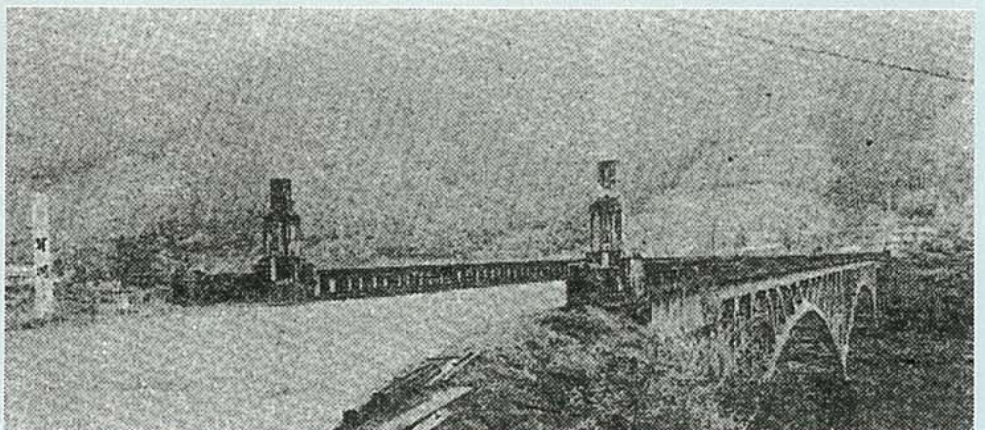


木製の時の東郷橋(明治43年)

④ 美々津橋

耳川河口には、それぞれの時代を代表する3本の橋が今でもりっぱに働いています。美々津橋はそのうちの1本です。

【3-2-(4)-④】耳川河口の上流側にか
けられている美々津橋は、日向市が平
成8年に市の有形文化財建造物に指定
しました。また、美々津橋は、昭和9年
の建造でスパンドレルプレストアーチ
として現存するものの中では国内で最
も古い橋の一つで、学術上も貴重な土
木文化財です。この美々津橋をモデル
として、日之影町の青雲橋と槇峰大橋
がかけられています。



美々津橋

3-3:洪水と人々の暮らし

(1) 洪水の記録

長年、耳川を利用してきた人は、今も昔も洪水の被害に苦しめられてきました。ただし、上流から材木や産物を流すのに、洪水の力を利用することもありました。

① 江戸時代におきた洪水

耳川ではむかしから大雨や台風による被害がありました。とくに、下流の人たちは大きな被害を受けることがあったようです。

[3-3-(1)-①]:今から300年ほど前の元禄6年6月25日に、台風による洪水で美々津の立磐神社の鳥居が倒れたと言われてい
ます。立磐神社は耳川の河口に近い南岸にあります。この神社の鳥居が倒れたのですから、すごい大水だったはずですよ。

200年程前の寛政9年の台風では、殿様が宿泊する御仮屋が吹き倒され、180年程前の文化7年の大風雨では、美々津の下町が幅2間(約4m)、長さ176間(約320m)の大波でくずれ、2軒の家が壊れたと言われています。

嘉永3年8月6日、7日の台風での被害は大きく、お米はほとんど取れませんでした。さらに9月1日から大雨になり大水が出て荒谷地区で土砂崩れが起こったのを始め、被害は数えきれないほどでした。

一方、この地方では、昔から雨期の大水の勢いを利用して椎葉・諸塚地方の材木を美々津まで運んできましたが、下流の美々津付近に洪水があると木材は日向灘にまで流れ出たそうです。洪水も上流下流といった場所や時期によっては、つごう良くもなり悪くもなったわけです。



② 近代の洪水

むかしから洪水の被害にあってきた耳川の人たちは、今でも台風などで大きな被害にあうことがあります。

●明治の洪水

明治の代表的な水害には、明治43年に起こった洪水があります。この洪水によって、耳川にかけられた木の橋の多くが流されてしまいました。

●昭和の洪水

入郷地域は地形的に風水害を受けやすく、台風や梅雨期の集中豪雨のたびに山崩れや崖崩れが発生し、建物や田畑がひどい被害を受けていました。「昭和19年9月18日の暴風雨で、耳川が一瞬のうちに増水し、笹陰の住家が4戸流出した。」「昭和29年6月8日に来襲した台風19号で耳川が増水し、笹陰の塩月嘉次郎宅が床上浸水したため、近くの公民館に避難した。」などの記録があります。

●平成の洪水

平成に入ってから、台風による集中豪雨のために、大内原ダムの下流区間で浸水被害がたびたび発生しています。特に大きな被害として、平成5年8月の台風7号による43戸の浸水、平成9年9月の台風19号による268戸の浸水などです。



平成9年9月台風19号による洪水



(2) 洪水と百姓一揆

むかし、洪水で作物がとれなくなった農民が、
集団で逃げようとした大きな事件がありました。

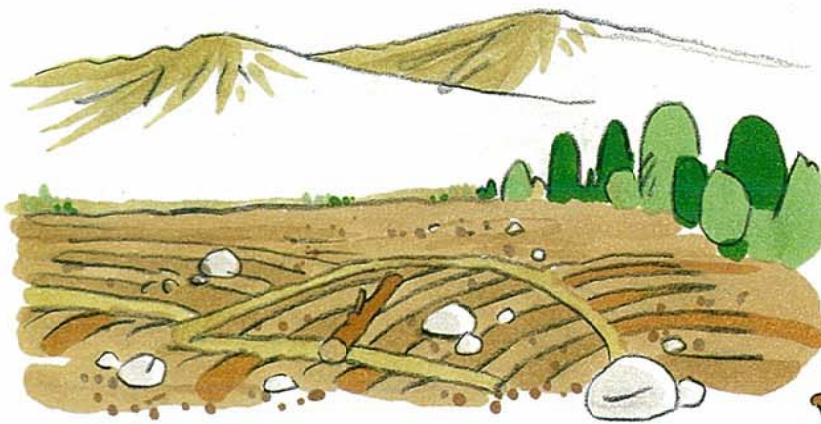
【3-3-(2)】: 元禄のはじめ、延岡藩山陰地域(今の東郷町)で3年
続きの大雨で耳川で洪水がおき、2千石の美田はひどく荒れは
てました。農民は食べていけないほど大変でしたが、藩の役人は
それを無視し年貢を取り立てました。農民達は最後の手段とし
て1400人が集まり薩摩藩へ逃げようと、百姓一揆を起しました。
しかし隣の高鍋に出たところであまり、幕府評定の判決で農
民の代表は死刑になりました。藩主も越後の国(現在の新潟県)
へ転封させられるという大事件がありました。

※1 石:1石はお米の俵2.5個分(約150kg)。昔はお米の収穫量(石高)が領地の大きさ
や経済力を表していました。

※2 評定:現在の裁判所のようなもの。

※3 転封:治める場所を変えること。

山陰の百姓一揆記念碑



(3) 洪水による恩恵

洪水も悪いことばかりではなく、時には役に立つことがありました。

① 洪水による土砂の洗い出し(港がホゲル)

洪水で港の入口につもった土砂が流れるので、舟の出入りが楽になります。

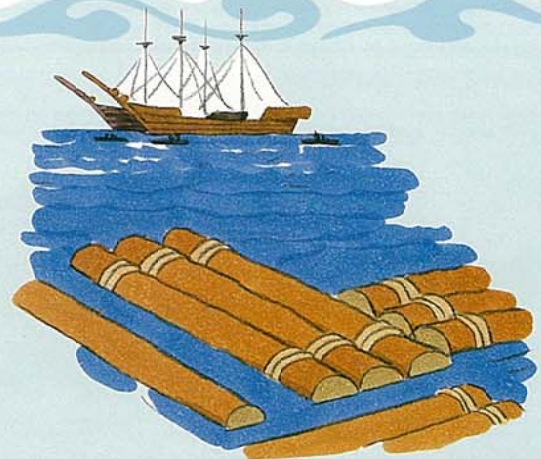
【3-3-(3)-①】大洪水は、川岸に被害をおこしましたが、「適度の洪水」は美々津にとっては自然の港工事の代わりにもなりました。河口にたまり、舟の通行を邪魔していた砂が流れ去り港口が深くなるので、これを美々津の人は「港がホゲル」と言ってよこんでいました。



② 材木流し

大きな木材を流すために、洪水の力を借りることもありました。

【3-3-(3)-②】大きな木材は切り出したあと、川の中に「ツケ」において(止めておくこと)大雨を待ち、洪水の勢いで下流に流しました。また、海にまで流れ出た材木は、適度の波で近くの浜にうち上げられましたが、波が弱いと遠洋に流れていってしまい、行方不明になることもあったそうです。



3-4: 美々津の歴史

美々津は、神話の時代から大正時代まで、交通の要所として栄えた町でした。

【3-4】: 美々津は、神武天皇の大和東征船出の地として知られるように古くいわれのある土地で、漁業や農業がさかんであるばかりでなく、上方(現在の大阪・京都)との海上交通の要所として栄えてきた港町でした。明治時代の初めには、短いあいだですが県庁が置かれたこともあります。

昔の言葉に「高鍋で学者ぶるな、都農で喧嘩するな、美々津で小唄歌うな」と言うものがあります。文教の盛んな高鍋、馬の産地・交易地で力の強い人の多かった都農、それに上方文化の入口で芸も盛んだった美々津を、それぞれうまく表現したのですが、美々津と上方との交易が盛んだったことを伝えています。美々津の街並みは、江戸時代末期から明治・大正期に繁栄した港町としての面影を今でもよく残しています。

美々津の様子(大正～昭和初期)



美々津上町



耳川河口付近での潮干狩り風景



百町原の田植え風景(背後は松並木の街道【現在の国道10号】)

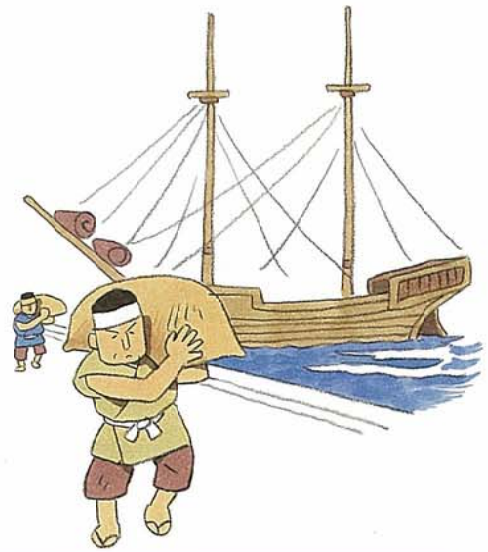


美々津町の全景(大正の頃)

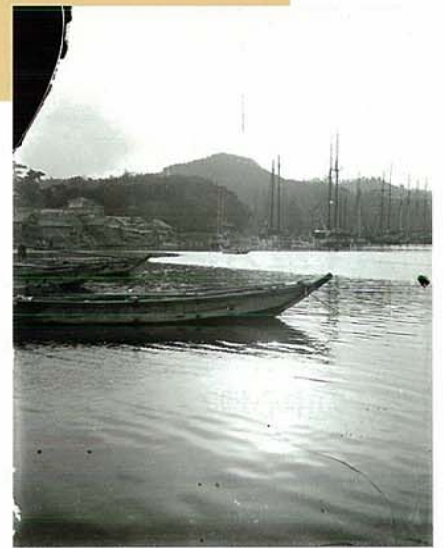
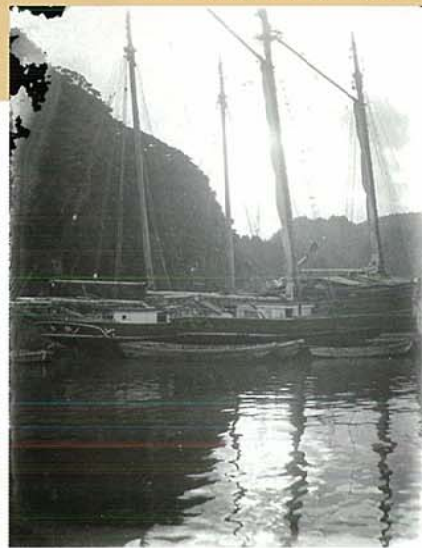
(1) 美々津港

美々津港は、荷物を積みおろす商港として、また、魚の集まる漁港としてにぎやかでした。

[3-4-(1)]: 美々津港は耳川の河口にある商港として栄え、上流から送られてくる木材、木炭、椎茸など、林産物の積み出し港として機帆船の出入りが多く、いつも港内にはたくさんの船が泊まり、木材がイカダの形で浮かんでいました。また、近くに豊富な漁場があったことから、漁港としてもにぎわっていました。



美々津港の様子（大正の頃）



(2) 上方文化の影響

文化活動が盛んだった天領日向。その入り口は美々津の港でした。

[3-4-(2)]: 天領時代 (= 江戸時代)、文化創造の主役は平民でした。天領だった日向地方の文化も京都や大阪、江戸などの中央に比べると、やや遅くても盛んでした。

天領時代の日向地方の文化の一つとして、俳句があげられます。当時、日向国には延岡系の俳句と城ヶ崎系の俳句がありましたが、細島港や美々津港を経由して入ってきたものもありました。

※天領: 朝廷の領地、江戸時代では徳川将軍の領地



(3) 美々津で唄を歌うな

むかしは流行の最新基地だった美々津。おしやれも歌もどこより新しかったようです。

[3-4-(3)]:「美々津は美人の産地だ」とか、「美々津で唄を歌うな」といった言葉がありました。美々津が上方文化を直接早くとり入れていたことを意味するものです。化粧品や髪飾りなど大阪直輸入だったことからおしやれは他の地域よりも早く、流行歌も若い船乗りがすぐ覚えてきてはやらせるため、美々津で古くなってしまった唄を歌うと恥をかく、という意味があったのでしよう。



(4) 美々津は県政の中心地だった

明治のはじめ、近代日本誕生の頃、美々津は「美々津県」の中心地でした。

[3-4-(4)]美々津には、明治4年7月の廃藩置県で新しく作られた「美々津県庁」が置かれ、一時、この地方の政治の中心地になりました。当初、日向の国は大淀川を境にして美々津県と都城県に分けられました。美々津県庁が最初に置かれた上別府の高台は、高鍋藩の殿様が宿泊する御仮屋が江戸時代に建てられた場所でした。その後、明治になって県庁が置かれましたが、この県庁舎は翌年、現在日向市役所が建っている富高に移されました。その3年後の明治7年には、この県庁跡を利用して美々津小学校が創立されました。この美々津小学校も昭和32年に移転し、現在は美々津地区公民館が置かれています。

明治6年、美々津県は都城県との統合により廃止されました。今は港の先の黒バエと呼ぶ岩礁に立つ「みひかりの灯台」と、美々津地区公民館にある「美々津県庁の跡」の石碑が、わずかに昔のおもかげをとどめているだけです。



当時の美々津県庁舎
※富高に移転後は美々津小学校として使用されました。



日向市美々津地区伝統的建造物群保存地区と美々津県庁跡(黄色の範囲)



現在の美々津県庁跡
(現在の美々津地区公民館付近)



高鍋藩主御仮屋跡
(現在の美々津地区公民館付近)



旧美々津小学校の門柱
(現在の美々津地区公民館付近)



美々津県庁跡の石碑(現在の美々津地区公民館付近)

(5): 交通の発達

交通手段の発達にともない、海運の中心は美々津港から細島港に移っていきました。

【3-4-(5)】: 大正の初め頃までは、美々津港が入郷地域の物流の中心でありましたが、日豊線の開通や道路整備の進展によって、舟運の利用が少なくなり、海運の中心はしだいに細島港に移っていきました。

しかしながら、大正12年の日豊線全線開通により大消費市場へと直結され、物資が北九州や東京方面へも出荷されるようになりました。

また、「百万円道路」の開通により、木炭の生産が奥地にも拡大するなど、交通手段の発達が耳川流域の経済発展に大きく貢献しました。

※「百万円道路」: 耳川の開発の時に住友財閥により作られた道路。
詳しくは【5-1-(1)】: 「耳川の開発と百万円道路」をご覧ください。

日豊本線開通の歴史



日豊本線の工事の様子

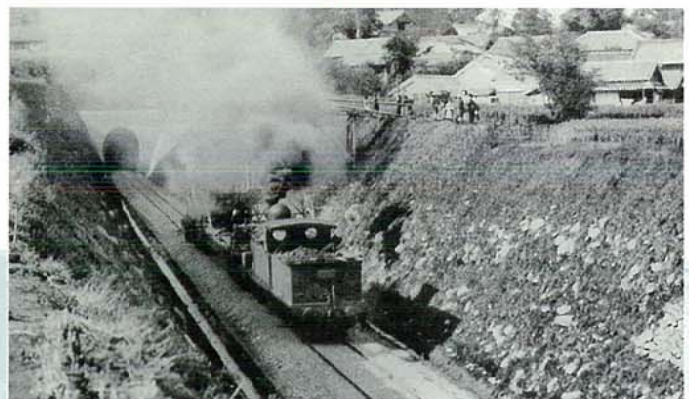
(美々津では大正7年に着工し、同10年に宮崎まで開通しました。)



工事中の鉄橋



完成した鉄橋



美々津トンネルの貫通



3-5: 耳川の二大決戦

(1) 大友、島津の耳川合戦

耳川は古戦場としても知られ、薩摩の島津氏と豊後の大友氏が戦い、大敗をした大友氏はこのために早くほろびたといわれています。

【3-5-(1)】: 天正6年3月大友宗麟は大軍をつれて日向に入り、島津軍側の松尾城をやぶりました。これにより門川城、日知屋城、塩見城、山陰城、田代城、神門城の北部地帯はすべて大友軍のものになりました。「美々津川を制する者は日向の国を制す」この言葉は天正年間に言われていた言葉です。その後、小丸川対陣の戦いで島津軍が優勢となり、逃げる大友軍を追って耳川にきました。高城と耳川の間7里(約28キロメートル)は倒れた兵で埋

まり、また、追いつめられて耳川でおぼれた兵もたくさんいました。この戦争で、豊後軍(大友)の戦死者は4000人になり、薩軍(島津)もまた3000人の戦死者を出したといわれています。敗戦を知った大友宗麟は、豊後に逃れました。その後大友軍の味方だった日知屋、門川、塩見、山陰、田代、坪谷、神門の各城主は皆、島津軍に誓いを入れ、島津配下となりました。後に耳川合戦と言われるのがこの戦いです。

びょうぶ
屏風に描かれた合戦の様子



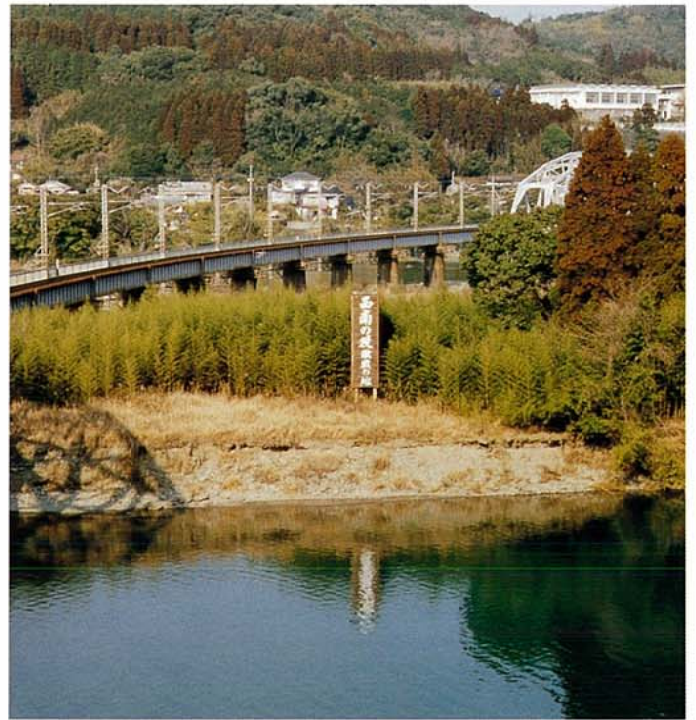
(2) 西南の役

大友・島津の戦いとあわせて「耳川の^{にだいきっせん}に二大決戦」といわれるのが、薩摩軍と官軍の西南戦争で、封建(武士)社会から近代国家へかわる節目の戦いの一つが、くりひろげられました。

[3-5-(2)]: 明治10年8月4日、耳川のあたりまで進出した官軍は、美々津、余瀬、宮ヶ原、横瀬と南岸8kmの間に大砲をならべ、美々津港沖からは3艦が船上から攻撃しました。北岸の薩軍は、耳川河口幸脇、笹野、飯谷、福瀬で敵を待ちました。また、耳川上流山陰地帯では、椎葉、米良方面より追撃してきた官軍が神門より坪谷へと薩軍を追ひ、耳川南岸まできました。薩軍は、山陰小野田で官軍の進軍を止めようとしてました。

8月7日、官軍は北岸の小舟を手に入れて耳川を渡り、小野田で薩軍との本格的な戦いを交えました。山陰小野田の薩軍陣地は耳川戦線のポイントで、弾薬や食糧を集めた基地だったので懸命に戦いましたが負けてしまい、薩軍は基地を捨て門川方面へにげて、門川方面でまたさらにはげしい戦いとなりました。

和田の戦いで官軍と薩軍は、和田の渡しを中心に耳川をはさんで砲撃戦、銃撃戦を交え両方とも多数の戦死者を出しました。薩軍は8日耳川で敗れ、14日に官軍は延岡に進みました。この後、薩軍は延岡でも負け、遂に9月1日鹿児島へと帰りました。



「西南の役激戦の地」(耳川河口の中島)



(3) 合戦にまつわる地名

耳川の近くには、古い戦争にちなんだ地名が今でも残っています。

【3-5-(3)】: 耳川の古戦場にちなんで、「駒隠し」、「かち渡り」、「立花瀬」等の地名が残されています。なかでも「企みが河原」は、豊とみ吉軍が九州征伐の時に氣勢をあげたところとして伝えられています。



駒隠し(現在の美々津橋付近)



企みが河原(現在の飯谷付近)



3-6: 植林の歴史

長く林業で栄えてきた耳川上流の地域では、木を切るだけでなく木を植える植林が行われてきました。

[3-6]: 藩政期は、延岡藩では広大な山林があるにもかかわらず、大規模な造林の事例はなくスギ等の美林は見られず、木炭とシイタケが代表的な産物でした。

17世紀中頃、山陰一揆の悪役とされた代官梶田十郎左衛門は、植林を強要しました。植林は米作りのじゃまになるという考えから、農民が逃げ出す原因になったと言われていています。このスギ造林が藩政の中で最初の造林の記録です。

この地方は、明治前期の官林引上げはほとんどなく、ほぼ全域が民有地として残されていました。しかし、明治末期には造林の大切さが言われるようになり、日露戦争記念造林や公有林造林などが盛んに行われ、このころから造林面積もようやく増えはじめました。

大正期には原野・荒地・低質広葉樹林としてそのままになっていた山林を村有林として整理し、官行造林も導入して積極的に造林が取り組まれました。

大正6年、椎葉村でもようやく本格的な造林が始まり、住友吉左衛門は椎葉村に1万町歩の造林を計画しました。

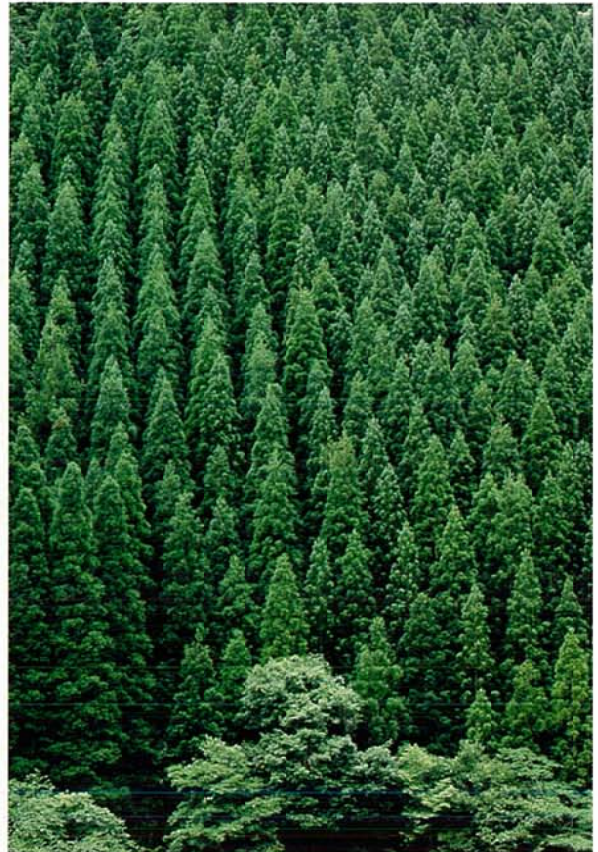
昭和初期になり、各地にオビスギ・ヒタスギ・オグニスギ等優良品種を植える実験も行われました。

このように昭和の戦前期までは、村や国、個人の財産として木を植えることはあっても、組織的な大造林はあまり見られませんでした。

昭和30年頃になるとようやく平和になって、あまり使われない炭用の木から高く売れる建築用へ切り替えようという計画が高まってきました。国・県の主導による拡大造林の計画が出されると、この周辺でも積極的に木を植えました。

この辺りは古くから水害が多発し、大きな災害を受けていましたが、森林をふやすことで山地・河川の防災効果も期待されました。

※町歩: 広さの単位、1町歩は約1ヘクタール



諸塚村のスギ植林



木材の伐採用具と製材用具(宮崎県総合博物館展示)

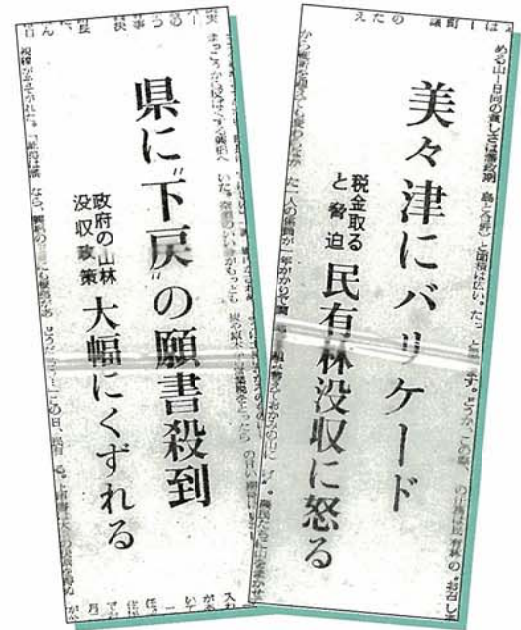
林務調査官一行を耳川で阻止

明治18年頃、政府は明治維新以後の藩籍奉還を進める一方で、官有地の区分を調査していました。宮崎県には明治21年に林務調査官の一行が来県し、山林を政府の所管に移すよう県民に説得しました。

この時、小林乾一郎翁は、山林資源が豊富で民有地の多い県北では、これを国有とすることは住民の利害に大きな影響を持つことを憂慮しました。そこで、調査官の県北入りを拒否しようと、郡長の原時行らに相談し、郡民と共に結集し、反対運動に立ち上がりました。郡民から全権を委任された翁は、調査官一行の県北入りを耳川兩岸にとどめ、さらに政府の要路に陳情するなどはげしい反対運動を展開し、ついに郡民の希望をかなえることに成功しました。

※要路:重要な地位の人

当時の毎日新聞の見出し



小林乾一郎翁の像



3-7: 漁業の歴史

(1) 食生活と川魚

流域に暮らす人々は、耳川と支川から水を引いて田をひらき、畑を耕し、川魚の漁などをして食糧を確保し、耳川の恩恵を受けながら生活してきました。耳川の川魚では鮎が有名だったのですが、昔は自家用だけではなく、東京や遠くは中国の大連まで出荷され、地域を代表する特産物として重宝されていたということです。

【3-7-(1)】:交通機関が発達していない時代は、海産物の魚は塩物^{しよくりよう}が中心で、「唐人干し」などの乾物^{かんぶつ}が主で生魚を食べることができるのはまれでした。村人たちの栄養としてのタンパク源は、もっぱら川魚が狩猟による獲物で、川魚の中でも最も重宝されたのは鮎^{あゆ}でした。自然遡上^{しぜんそじょう}していた鮎は、上流の椎葉村にまで遡上し、椎葉村史によると、明治40年の椎葉村での鮎の漁獲高は3,105貫^{かん}(約11,640kg)と記録されています。

また、明治12年前後の山陰村^{やまかげむら}、坪谷村^{つぼやむら}、八重原迫野内村^{はえはらさこのうちむら}での農暇^{のうかこう}の戸数は右の表の通りです。

※1貫:1貫は約3.75kg

※2農暇工:農業をしながら夏期には川魚漁で生計を立てる人



明治12年前後の農暇工戸数と漁獲高

村名	農暇工戸数	鮎の漁獲高	河川名
山陰村	19戸	3万匹	耳川本川
八重原迫野内村	5戸	1万匹	耳川本川
坪谷村	5戸	5千匹	坪谷川

(2) 川魚の漁法

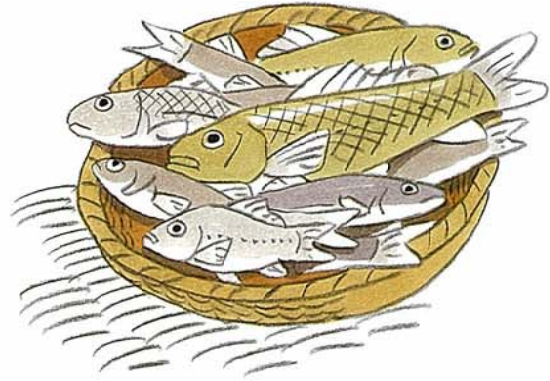
【3-7-(2)】:古くから行われてきた漁法に鮎築漁^{あゆなりよう}があります。これは鮎が産卵のために河口に下る9月下旬以降に川に築をつくり、下り鮎をとるものです。築には「本築方式」と「土佐築方式」がありますが、流れの速い耳川では、川を斜めに堰切つてかける「土佐築方式」が多かったようです。

また、その他の鮎の漁法には罎掛け^{おとり}(友釣り)やチョン掛け、サビキ掛漁、濁りすくい漁などがあります。詳しくは【6-3】:「耳川の幸」をご覧ください。



(3) 鮎の商品価値と消費

【3-7-(3)】: 鮎は香魚または年魚とも呼ばれます。耳川は流れの中に急流や淵、瀬が多く清流であったため、川苔をえさにする鮎が良く育ち、上流にいくほど成長が良く商品としての価値が高かったようです。



川魚のうち、鮎を除いてほとんど自家用として消費されていましたが、鮎は生鮎や焼鮎として村外にも出荷販売されていました。自家用としての鮎は、内臓物を抜き、火で炙り、乾かして冬場の保存食として、「だし」や「昆布巻」、「甘露煮」などの材料に使われ、重宝な食べ物の一つでした。特に、10月以降に築に落ちる鮎は卵をもっており、あぶらがのって美味だったそうです。

川魚の消費高の記録(明治41年「村是」より)

種類	消費高	当時の価格
鮎	9,600貫(36,000kg)	9,600円
ウグイ(イダ)	500貫(1,880kg)	300円
鰻(ウナギ)	1,250貫(4,690kg)	1,250円
鰻(ボラ)	100貫(375kg)	100円
雑魚	1,500貫(5,630kg)	600円

※記録の消費戸数は1,244戸 ※1貫は約3.75kg



また、昭和初期の東郷村(現東郷町)山陰又江野では、「鮎文」の屋号で佐藤文治郎という人が手広く鮎取引をしていました。当時は、東郷村や西郷村、諸塚村、椎葉村で鮎の買付けを行い、糞出しを行ってから二重の特別な箱に氷詰めにして、東京築地の魚市場や日本橋の料理店、岐阜県などに出荷されていました。遠くは門司から中国大連まで販路を広げていました。このほか、おなかに卵をもった鮎からつくる「うるか」や焼鮎も好評だったそうです。



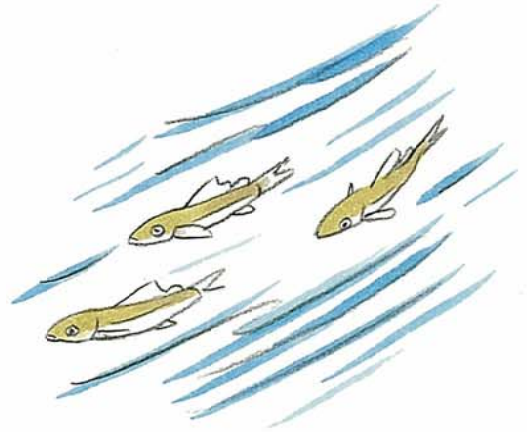
(4) ダムの建設とその影響

【3-7-(4)】: 耳川は水量が多く、渓谷型の河川の特徴があるため、県下有数の電源開発地帯として注目されていました。昭和4年に耳川にはじめて西郷ダムが建設されてからは、現在までに8箇所にダムが建設されています。

耳川の鮎は東京その他の地域に送られ、大変好評でした。

しかしながら、ダム建設により、川の流は堰き止められて川魚の遡上は魚道にのみ頼ることとなりました。

このため、昭和4年には、美々津町余瀨(現日向市)と対岸の岩脇村幸脇(現日向市)に住む漁業関係者が、河川漁業では生活することができなくなったと県に陳情し、転業資金を賠償金として住友から補償してもらうよう要求しました。



(5) 県営東郷養魚場の設置

【3-7-(5)】: 昭和2年に、住友から出されていた耳川の水利権申請が許可されました。その際、住友は漁業補償として、東郷養魚場を県に寄贈し、昭和6年に建設されました。ここでは当初、鯉の稚魚12万尾を「放流用」として生産していましたが、その後、「放流用」と「養魚用」の両方の生産を目的とし、耳川だけでなく県北一帯の供給地となりました。養魚池は18面設置され、その広さは全体で1,191.6坪(約3,930m²)もありました。

この県営の養魚場は、昭和38年に廃止され、耳川水系管理委員会に県から払下げられましたが、昭和51年に東郷町の耳川漁協に移譲され、翌年東郷町に贈与されました。



(6) 漁業協同組合の設立

【3-7-(6)】:昭和24年に水産業協同組合法が施行されたことにより、知事の認可を受けた漁協(漁業協同組合)が誕生しました。また、昭和27年に大内原ダムが建設されることになり、漁業に関する諸問題を協議するために、余瀬飯谷漁協(現日向市余瀬、飯谷)、耳川漁協(現東郷町)、西郷漁協(西郷村)、諸塚漁協(諸塚村)が連合して「耳川水系漁業協同組合連合協議会」が設立されました。また、昭和38年には美幸内水面漁協(現日向市美々津、幸脇)と椎葉漁協(椎葉村)が加盟し、6漁協で耳川水系管理委員会が設立されました

耳川の漁業協同組合の管理区域

組 合 名	管 理 区 域
椎葉村漁業協同組合	椎葉村行政区域
諸塚漁業協同組合	諸塚村行政区域
西郷漁業協同組合	西郷村行政区域
耳川漁業協同組合	東郷町行政区域
余瀬飯谷漁業協同組合	東郷町行政区域より下流田代ヶ原小谷尻より高見ヶ浜堤防頭見通し線
美幸内水面漁業協同組合	田代ヶ原小谷尻より高見ヶ浜堤防頭見通し線より下流美々津大橋の下流

